きつねのおきゃくさま

あまん　きみこ

むかしむかし、あったとさ。

はらぺこきつねが歩いていると
がぶりとやろうと思ったが、やせているので考えた。
太らせてから食べようと。

そうとも、よくある、よくあることさ。

やせたひよこがやってた。

「やあ、ひよこ。」

「お兄ちゃん？やめてくれよ。」
きつねは、ぶるるとみぶるいした。

やあ、きつねお兄ちゃん。」

でも、ひよこは目をまるくして言った。
「ねえ、お兄ちゃん。どこかにいいすみか、ないかなあ。
こまってるんだ。」

おこり

きつねは、心の中でにやりとわらった。
「よしよし、おれのうちに来なよ。」

するとひよこが言ったとさ。
「きつねお兄ちゃんって、やさしいねえ。」

「やさしい？やめてくれったら、そんなせりふ。」
でも、きつねは、生まれてはじめて「やさしい」なんて
いわれたので、少しぼうっとなった。
ひよこをつれてかえるとちゅう
「おっとっと、おちつけおちつけ。」
切りかぶにつまずいて、ころびそうになったとさ。
きつねは、ひよこに、それはやさしく食べさせた。

そして、ひよこが「やさしいお兄ちゃん」と言うと
ひよこはまるまる太ってきたぜ。

つづき1

ぼうっとなった。

はあん。にげる気かな。
きつねは、そうっとついていった。

ある日、ひよこが、さんぽに行きたいと言い出した。

きつね

えものがとれないで、はらをすかせていたきつね。やせたひよこを太らせてから食べようと考えた。
しかし、ひよこに、生まれて初めてやさしいと言われて、まんざらでもない。

ひよこ

ひとりぼっちですみかもないひよこ。きつねのことばをすなおに聞き、きつねをやさしいと言うひよこ。

きつね

ひよこにやさしく食べさせるきつね。「やさしい」と言われるたびにぼうっとするきつね。親切ぎつねになる。

ひよこ　きつねをやさしいと信じて疑わないひよこ。

ひよこ

しあわせなくらしを続けるひよこ。きつねを親切だと言う。

分析のために

それをかげで聞いたきつねは、うっとりした。そして、親切なきつね」ということばを、五回もつぶやいたとき。
さあ、そこでいそいでうちにかえると、まっていた。
きつねは、ひよことあひるに、それは親切だった。

のを聞くと、ぼうっとなった。

はあん、にげる気かな。
きつねは、そうっとついていった。

それをかげで聞いたきつねは、うっとりして、きぜつしそうになったとさ。
そこで、きつねは、ひよことあひるとうさぎを、そうとも、かみさまみたいにそだてた。

つづき 3

ぼうっとなった。

ひよこが春の歌なんか歌いながら歩いていると、
やせたあひるがやってきたとき。
『やあ、ひよこ。どこかにいいすみかはないなあ。こまってるんだ。』
あるわよ。きつねお兄ちゃんちよ。あたしといっしょにきましょ。』
『きつね？　とんでもない。がぶりとやられるよ。』
と、あひるが言うと、ひよこは首をふった
『うん。きつねお兄ちゃんは、とっても親切なの。』

そして、二人が「親切なお兄ちゃん」の話をしているところへ

あひるも、まるまる太ってきたぜ。

ある日、ひよことあひるが、さんぽに行きたいと言いだした。

ひよことあひるが夏の歌なんか歌いながら歩いていると、
やせたうさぎがやってきたとき。
『やあ、ひよことあひる。どこかにいいすかはないかなあ。こまってるんだ。』
あるわよ。きつねお兄ちゃんちよ。あたしたちといっしょに行きましょう。』
『きつねだって？　とんでもない。がぶりとやられるぜ。』
『うん。きつねお兄ちゃんは、かみさまみたいなんよだ。』

そして、三人が「かみさまみたいなお兄ちゃん」の話をしていると

うさぎも、まるまる太ってきたぜ。

あひる
本来のきつねを知っているあひる。しかし、ひよこがまるまる太って、親切なきつねのことを言うので、信じていたあひる。

二人は、きつねの親切さを語り合った。

きつね
親切なきつね、と自分が思われているのを知って、すっかりれしくなり、二人を大切にするきつね。

ひよことあひる
きつねに大切にされて、しあわせなくらしをしている二人。

うさぎ
きつねのこわさを知っているが、ひよことあひるの姿を見て、きつねのうちにいくうさぎ。

きつね
かみさまみたいだと話しているのを聞いて、よりいっそうれしくなり、三人を大切に大切に育てるきつね。
三人に喜ばれることがこよなくしあわせだと感じている。

「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」
言うなり、きつねはとび出した。
きつねの体に、ゆうきがりんりんとわいた。
おお、たたかったとも、たたかったとも。
じつに、じつに、いさましかったぜ。
やま
そのばん。
きつねは、はずかしそうにわらってしんだ。

おおづめ

この物語がはじまる前のそれぞれの生きてきた姿を想定しなければ、このものがたりの本質にはせまれないのではないかと思える。

この物語がはじまるまでのきつねはどうだっただろう?

この物語がはじまるまでのひよこはどうだっただろう?

この物語がはじまるまでのあひるやうさぎははどうだっただろう?

これを含めて、感情曲線のようなものを作っていく。

題名について考える。

きつねにとって、おきゃくさまとは何だったのだろう?

ある日。くろくも山のおおかみが下りてきたとさ。
「こりゃ、うまそうなにおいだねえ。ふんふん、ひよこに、あひるに、うさぎだな。」

そして、おおかみは、ととうとにげていったとさ。

まるまる太った、ひよことあひるとうさぎは、にじの森に、小さいおはかを作った。
そして、せかい一やさしい、親切な、かみさまみたいな、そのうえゆうかんなきつねのために、なみだをながしたとさ。

とっぴんぱらりのぷう。

おおかみ
ひよこに出会う前のきつねのすがた。

きつね
かけがえのない三人がおそわれるのを見過ごすことができず、また、今の自分たちのしあわせなくらしをこわされたくなくて、いのちをかけてまもったきつね。
三人をまもることができて安心し、また、三人が悲しんでくれていることがきはずかしくて、わらって死んでいった。

三人
かみさまのようなきつねをていねいに葬った。

きつね
三人にとってのかみさまになった。

未完　2004／2